

広報誌の電子書籍化を考えるにあたって

総合メディア基盤センター 森 祥寛

1 はじめに

電子書籍が、紙とインクの印刷物である所謂「紙の本」に対して大きく異なる点は、「①電子書籍を読むための機器（パソコンやスマートフォン、タブレット端末等）が必要」なことです。このため紙の本のように、本だけで情報を得る手段として完結しません。また印刷物という実体を持たないため、「②読むための機器にあわせて、機器にどのように情報を表示するのか」という点も大きな検討要素となります。これは販路にも大きな影響を与えます。実体がない故に在庫を抱える必要がない代わりに「③どのようにコンテンツを渡すのか」という点が検討要素となるのです。①から③の3点はこれまでの紙の本にはない要素で、電子書籍を作る側と使う側、双方の要求が存在しています。以下では各点について検討していきます。

2 電子書籍を考えるに当たって

2.1 端末：電子書籍を読むための機器

ここでは「機器の専門性」と「表示方法と大きさ」の2軸を考えます。「機器の専門性」とは、それが電子書籍を読むためだけの機器であるか、他の機能も有しながら機能の1つとして電子書籍を読むことができるかの違いです。パソコンやスマートフォン等は後者に入ります。「表示方法と大きさ」とは、主に電子書籍を表示する画面に関することです。これは機器の携帯性や書籍としての可搬性に繋がっていきます。

この2軸は電子書籍をどのような場面で、どのように利用したいのか、或いは利用させたいかという選択を示しています。

2.2 フォーマット：機器にどのように情報を表示するか

電子書籍をどのように画面表示するかは、文章を読む（図や写真を見る、漫画を読むということも含む）という行為へのアプローチ方法の選択になります。それは電子書籍のファイルフォーマットやそれを表示させるアプリケーションの選択といえるでしょう。

選択軸としては、(あ) 普通のホームページやブログの画面のようにスクロールさせて読むか、紙の本のようにページをめくって読むか、(い) テキストデータを直接表示させ、読みたい文字の大きさに合わせて表示を調整する(リフロー系)のか、画像ファイルとして表示させる(画像系)のか、(う) 電子書籍のタイトル毎に別のアプリケーションとするか、タイトルはコンテンツデータとしてのみ扱うかという、3つが考えられます。現在、電子書籍という場合、(あ)(い)ともに後者が選択される場合が多いようです。そして2015年

現在、ファイルフォーマットとして代表的なものがEPUB3形式とPDF形式で、主に前者はリフロー系、後者は画像系のフォーマットです。どちらもISO国際規格となっており、この形式で電子書籍を作成すれば、端末やプラットフォームによらず読むことが大体できます。プラットフォームによっては独自規格のフォーマットを使用していることがありますが、大抵の場合、EPUB3からの派生（セキュリティに係る機能などを付加）です。ここ1、2年はEPUB3を教育用に拡張したEDUPUB形式を国際規格とするべく議論・開発が進められています。

2.3 プラットフォーム：どのようにコンテンツを渡すか

電子書籍の多くは、価値あるコンテンツとして販売されています。そのため勝手に複製を許さないように、コンテンツを囲い込むようなプラットフォームが必要とされています。これは単に電子書籍を読むだけのソフトウェアという位置づけではありません。

2010年以降、印刷、通信、ベンダー企業等の様々な分野から参入が相次ぎ、プラットフォームは過当競争状態となっています。現在はプラットフォーム間でのデータ交換はしにくく、同じタイトルの本であっても、別のプラットフォームを使って読む場合は買い直さなくてはなりません。このような不便さは電子書籍の広がりにも影響を与えています。

3 今後、電子書籍は広がっていくか？

iPadが販売された2010年は何度目かの電子書籍元年と呼ばれ、今では電子書籍という言葉も社会に浸透しつつあります。しかし今も紙の本は「紙」であるという点で電子書籍に勝っているようです。2000年歴史を持つ紙を超えるには、機能で勝っているだけでは勝つのが難しいのでしょうか。では、電子書籍は広がらないのでしょうか。これには前節での選択軸以外の要素が大きいかもしれません。電子書籍は電磁的に記録されたものです。これは物理的な大きさ、質量を持ちません。従ってどれだけの冊数であっても、保存できる記録媒体と容量があれば電子書籍を所持することができます。これは電子書籍の広がりへの大きなアドバンテージではないでしょうか。特に出張先等で論文や本を読みたいとき等には非常に助かります。筆者自身も電子書籍で本を持ち歩くようになってから出張時の手荷物が非常に軽くなりました…。

金沢大学総合メディア基盤センターは、情報技術の利活用を率先して示していく必要のある部署です。電子書籍化についても新しい形を見いだしていくための研究が必要かもしれません。